（4） 糸賀一雄は何故、新しい価値観の創造を目指したのか「この子らを世の光に」①

施設長　福田 雅文

今も、ウクライナやガザ地区で非人道的な爆撃が行われている。とくにガザ地区では民間人、難民、学校、病院なども攻撃の対象とされ、何の抵抗も出来ない赤ん坊や子どもたちにも多くの犠牲者がでている。戦争の中では一人ひとりの人権や人間の尊厳を尊重する余地はない。戦争だけはどんな理由があっても避けなければならない。

糸賀一雄が生きた時代(1914-1968)は世界中が戦争に巻き込まれ、第一次世界大戦では 4 年間で軍人と一般市民をあわせて 1500 万人以上の死者、第二次世界大戦では推定被害者数の総計は 5000 万～8000 万人とも言われている。

日本では 1938 年に国家の全ての人的・物的資源を政府が統制運用できる国家総動員法が発動された。国は人間を戦争の道具と考え、国家に忠実な自己犠牲精神を備えた国民を作ろうと、自由な発想、思想は制限・禁止され、日本は戦争へと突き進んでいった。そして 1945 年、広島と長崎に原子爆弾が投下されて、悲惨な結末となった。日本人の死者数は 310 万人（市民死者数 80 万人）となっている。

日本では深い反省から二度と戦争はしないと決め、平和憲法といわれる日本国憲法が制定されたが、戦後の日本は戦災孤児が溢れ、家族や家を失った子どもたちの状況は悲惨であった。そこには重い障がいがある子どもたちの生きる場はなかった。

糸賀は医学部を目指して勉学に励んでいたが、高校の時に結核に罹患、療養中にキリスト教に巡り合い、洗礼を受けた。そして医学部志望から宗教哲学へ方針を変え、京都大学哲学科に入学した。卒業後は、終戦前後の混乱する社会で滋賀県に勤務し、総動員課や秘書課長など公的立場で激務に奔走した。

糸賀は「戦争により被害を受けた戦災孤児や生活困窮者は社会の暗闇に追いやられて、精神薄弱児も忘れられ虐げられた存在として、犯罪へと追いやっている現状に対して、日本の再建を『弱者を切り捨てたまま発展』すれば、将来の日本はとり返しのつかないことになる。人道や道徳は霧散し、虚無感がのこる。」と日本の将来を憂いていた。新しい日本の将来を考えると、これまでの価値観では再び一人ひとりの人権を無視した悲惨な戦争の歴史が繰り返されると考えた。いまこそ新しい価値観を創造する必要があると考えた糸賀は、「エリートではなく、戦災孤児や障がい児とともに作っていく社会こそが、平和と発展につながる。この子どもたちの教育は結局世界平和につながる」と考えて、当時の優れた教育実践家の池田太郎、田村一二らと共に「近江学園」建

設に夢を描き、動き始めた。

「人権を踏みにじり、戦争を続けてきた破滅的な思想を打破し、個人を尊重すること、人権を守ること、争いのない心豊かな平和な世界」を夢見て、「近江学園」という障がいのある子どもたちと一緒に暮らすなかで、平和な社会を築く基盤となる新しい福祉思想の創造を追求した。

近江学園では仲間とともに家族も一緒に暮らして同じ運命にまきこみ、情熱をささげて、近江学園の生活の内側から、人間の心情の真実を追い求めた。環境不良児といわれる浮浪児、戦災孤児、生活困窮児 60 名と世の中から忘れられた精神薄弱児 50 名に対して、四六時中勤務、耐乏の生活、不断の研究を近江学園三条件として療育実践研究を行った。

学園創立二十年となった記念に、糸賀は歴史的にも貴重な「この子らを世の光に」と題して本を出版した。糸賀はあとがきに「二十年を振り返り、近江学園がはじめからいまにいたるまで子どもたちへの愛情と共感でむすばれた学園であった」と述べている。「障がいのある子ども」と「障がいがない子ども」が一緒に暮らしたからこそ見えてくる新しい世界を糸賀は実践研究として記録した。その内容の一部を紹介したい。

恒例の修学旅行（汽車での伊勢旅行）は一部：知的に普通児と二部：知的障害児がそれまで別々に旅行していたが、開園五年目で、学園の理想の一つとしている、「子どもたちからの自発的な申し出」があった。一部の子どもがこれまでのように一部と二部が別々に旅行するか、それとも今回は一緒に旅行するかどうかで投票を行うことになった。その結果なんと 25対1の圧倒的多数で賛成となり、一緒に旅行することになった。

障がいのない子どもたちは旅行中の決まり事を話し合い、1）切符の世話以外は自分たちでやる。2）二部チンという言葉は使わず、名前をよぶ。3）二部の人をいたわって、家来にしない。と自分たちで旅行中の計画を立てた。

その結果、一部の子どもたちが二部の子どもたちを至れり尽くせりの世話をした。歩くときも、汽車に乗るときも、トイレも・・・（一対一対応）。自分のお小遣いも二部の子のために使いはたしていた。語りたいエピソードは山ほどあった。

最後に宿のおかみさんが「いろいろの学校は来られますが、こんな生徒さんは珍しいですよ」と話してくれた。

心配していた万引きもけんかもなく、一人の迷い子もなく、そして私たちは一度も子どもたちを怒鳴りつけることもなかった。清々しい旅であった。

学園が建設されて数年の間に、知的に普通の子と障がいのある子を同じ施設で生活し教育していくなかで、障がいを持つ子どもたちを「世の中の光」とした社会こそが大切であるという考えが、糸賀や職員の心のなかに、芽生えていた。

糸賀は「素朴なそして純粋な人間性をもって生きる姿が、この地上で泥沼に咲いた白蓮のような生き方を示してくれたら、それこそ『世の光』なのではあるまいか」と考え始めていた。